

ガイドブック 十勝岳連峰・望岳台の自然



国立大雪青少年交流の家

学校での理科学習やふるさと学習、総合学習での自然観察などのかかわりから、生きた教材として「十勝岳連峰」や「望岳台」を活用した学習となる良い機会となりますように。

富士山に登って山岳の高さを語れ。
大雪山に登って山岳の大きさを語れ。
余は大雪山に登って、先ず頂上の偉大なるに驚き、
次に高山植物の豊富なるに驚きぬ。
大雪山は実に天上の神苑なり。

大正10年に大雪を踏破した時の文豪「大町桂月」は、
歓喜と驚愕とに踊る筆をとって、その紀行文を世に送った。
(1923年 中央公論「層雲峡より大雪山へ」)

■大雪山系の自然

大雪山系は、自然の景観に恵まれ、また山と人との関わり歴史も新しく、本州の山々に比べ人間くささのない山が多い。それだけ自然はよく保存されている。そのため可憐な高山植物が集まっているお花畑や深い緑の樹海（原生林）、静かな湖、あるいは壮大な高原や溪谷、そして、そこに息づく愛すべき動物たちなど、美しく豊かな北国の自然がいたるところに展開されています。

その優れた自然や風景、地質地形、野生の動植物などを含む広大な自然公園を対象に、自然保護や人間と自然との共生に向け、自然の原始性を最も厳しく保護しようとする特別保護区を設けたりして、自然公園の保全・保護と利用との両面から、様々な環境づくりの取り組みをすすめています。

【大雪の四季】

大自然と触れ合う喜びは、四季おりおりに色彩をかえ、変化していくところにあります。自然体験活動は、大自然との対話であり、人と自然が親しく向かい合うとき、至上の幸福が生まれてきます。

雪解けとともに長い冬の蓄えがいつぱんに力を出し始めるような「春の山々」。高山植物の花盛りです。短いけれど強烈な印象を植え付ける「夏の山」。登山シーズン真っ盛りです。静かさと紅葉に包まれる「秋の山」。赤や黒の実・赤や黄の葉が山を彩ります。風雪に耐え緊張の度を強くする冬の山々。真っ白に化粧した鮮やかな山並みが絶景です。



春の高山植物：チングルマ

大雪山系の山々







十勝岳連邦について

(1) 大雪山国立公園の概要 (昭和9年12月4日指定)

北海道の中央部に位置し、2,308.9k m² (神奈川県に相当)の広さを有し、日本で最も広大で原始性豊かな一大山岳公園です。

先住民族のアイヌの人たちは、この地域を「ヌタクカムウシュッペ」(湿地の沼や川のある神秘的な高原)と呼び、白雲の去来する神秘的な沼や高山植物の咲き誇る別天地を見てこう呼んだと言われています。

このように、「大雪山」とは、一つの山を指した固有名詞ではなく、北海道の最高峰「旭岳」(2,229m)を中心とした山岳の総称なのです。

大雪山系の山は、標高2,000m前後ですが、緯度が北にあるため、日本アルプスの3,000m級の山々に匹敵する高山環境を持っています。

大雪山国立公園は、地質と地形の面から見ると、①「旭岳」を中心とする**大雪山火山群** ②「十勝岳」を主峰とする**十勝岳火山群** ③非火山性の**石狩岳山群** ④然別湖を抱く**然別火山群** の4つに大別できます。

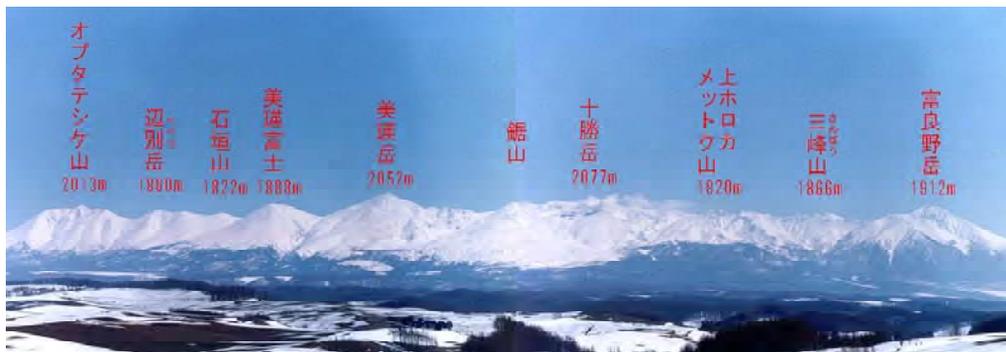
大雪の山々の溪谷深く積もった雪は万年雪となり、この雪が源となって、美瑛川から「石狩川」へ、富良野川から「空知川」そして「石狩川」へ。一方、東大雪側は「十勝川」へと流れ、それぞれ「石狩平野」と「十勝平野」を潤し、まさに北海道の母なる川といえます。

この国立公園の大部分は、寒地性針葉樹でおおわれているため、数多くの動物の生息地として、数百種にのぼる高山植物の宝庫として学術的にも貴重な存在となっています。

(2) 十勝岳連邦の概要

大雪山国立公園の南に位置する十勝岳連峰は、北からオプタテシケ山(2,013m)、ベベツ岳(1,860m)、石垣山(1,822m)、美瑛富士(1,888m)、美瑛岳(2,052m)、鋸岳(2,008m)、十勝岳(2,077m)、前十勝岳(1,800m)、三段山(1,748m)、上ホロカメットク山(1,920m)、上富良野岳(1,893m)、三峰山(1,866m)、富良野岳(1,912m)の山々が連なっています。

この山は分水嶺をなし、東斜面からは十勝川本流とその支流、西斜面からは美瑛川(石狩川の支流である忠別川の枝川)、富良野川、布部川(石狩川の支流である空知川の枝川)の源となり、それぞれ太平洋と日本海に流れこんでいます。



(3) 十勝岳 (2,077m)

十勝岳は、十勝岳連峰の最高峰であり「本峰」とも呼ばれます。その登山路は、西斜面からのコースが一般的であり、泥流跡地や噴煙に包まれた火口、断崖絶壁の斜面、数々の奇岩、風に乗って運ばれてくる硫黄の匂いなどは、この景観とともに登山の醍醐味の一つです。

十勝岳は、数多くの爆発記録があり、十勝岳特有の広大な泥流跡地や旧噴火火口、大正火口、62火口(昭和37年)などの爆発の歴史を示す大小の火口は、今なお噴煙や噴気をあげ、自然の偉容を誇っています。

【爆発記録】

- ・安政4年(1857年)
- ・明治20年(1887年)
- ・大正5年(1926年)
- ・昭和37年(1962年)
- ・昭和63・64年(1988・1989年)

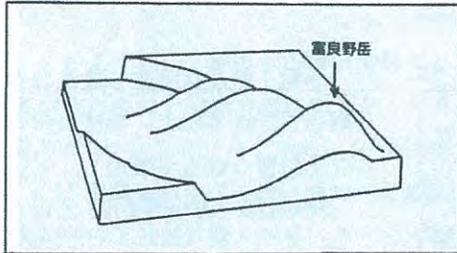


■十勝岳連邦の形成

十勝岳火山群は、その地形、特に浸食の程度から、新旧多数の火山体からなっています。形成年代によって更新世（1万～170万年前）中末期に生じた古期十勝岳火山群、中期十勝岳火山群、完新世（1万年～現在）に生じた新期十勝岳火山群の三つのグループに分かれます。

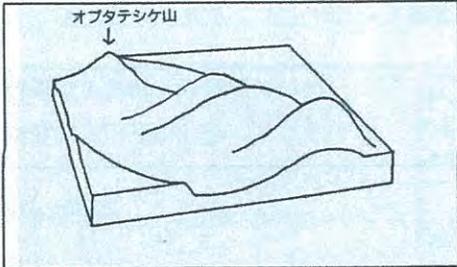
古期十勝岳火山群は、一般に著しく浸食をうけており、山ろくには広い扇状地や崖錐が発達しています。

(ア) 富良野岳



古期十勝岳火山群は、流動性の高い玄武岩～安山岩質の溶岩とスコリアなどの爆発放出物が互層して、いくつかの成層火山が生じたもので、富良野岳もその一つである。

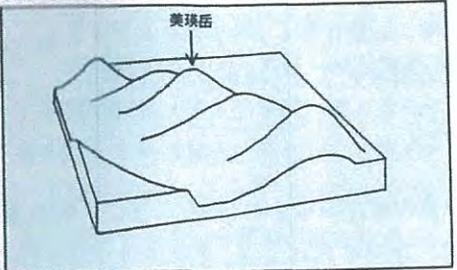
(イ) オブタテシケ山



中期十勝岳火山群も浸食をうけているが古期ほど進行していない。

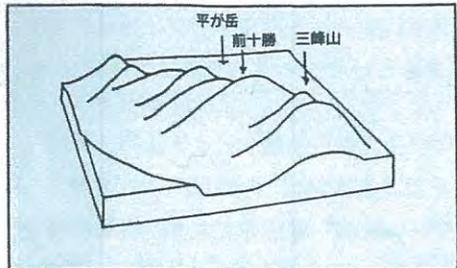
最初、白金温泉から望岳台にかけて広く露出する白金溶岩が噴出し、十勝岳連峰の北東にあるオブタテシケ山が形成された。

(ウ) 美瑛岳



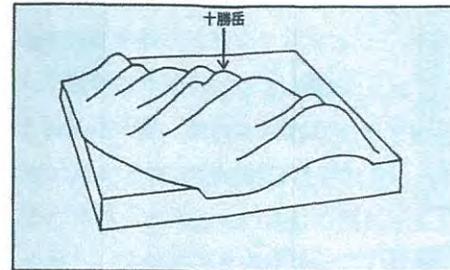
美瑛岳もその頃形成され、美瑛谷（ポンビ溪谷）などに見られるように、これら山体の浸食が進んだ部分では、成層火山の内部構造がよくあらわれている。

(エ) 平が岳・前十勝・三峰山



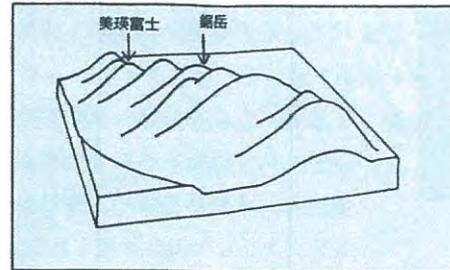
十勝岳の北にある平が岳、南にある三峰山および前十勝も中期十勝岳火山群に属する。また、三段山と上ホロカメットク山もこの時期に作られ、最初はこの山体であった。

(オ) 十勝岳（本峰）



中期十勝岳火山群の最後に十勝岳が形成された。粘性の強い安山岩質の溶岩が噴出し、ドーム状の山体（溶岩円頂丘）となっている。

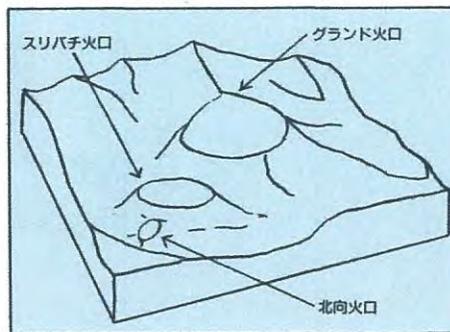
(カ) 美瑛富士・鋸岳



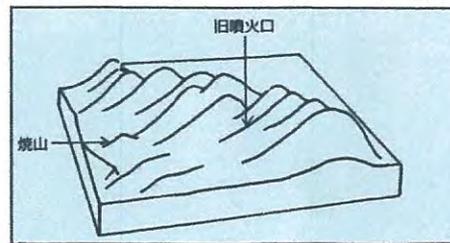
次いで、新期十勝岳火山群の美瑛富士、鋸岳などが完新世になって形成された。

山体は、新しい火山地形を保っている。

(キ) グランド火口・スリバチ火口・北向火口



その後、十勝岳頂上の北西側にはグランド火口（直径700m）・スリバチ火口（350×250m）・北向火口・中央火口丘などが形成され、また、溶岩も流出している。



(ク) 焼山の噴火と急噴火口の形成

十勝岳山麓では、焼山から溶岩が噴出し、ヌッカフヌイ川の源流には噴気を上げる旧噴火口があります。この爆裂火口は、上ホロカメットク山の山体を破壊し、三段山と上ホロカメットク山に分けています。旧噴火口は安政年間に噴火したということで「安政火口」と称していますが、定かではない。



■十勝岳火山活動の歴史

十勝岳は、北海道の最奥地にあるため、文書に残された噴火記録はわずか1世紀をさかのぼるにすぎない。古くから白金温泉で行われていた十勝岳アプフチ祭りの語源は、火の神を意味するアプフチカムイノミというアイヌ語からきているということから、十勝岳には火の神が住んでいて、常に煙を噴き、時々燃え上がったと信じていたに違いない。

故石山替治氏(明治7年山形県生まれ、美瑛町名誉町民)の懐古談がある。

「早崎悦太郎(兵庫県出身、漢字の美瑛の選定者)さんは、明治30年小作人を連れて現在の美沢の奥地に入り、亭々とそびえる巨木のため、昼なお暗い密林地を開墾したのだが、四囲これことごとく巨木で地形も見通せぬところから、小作人の一人が木によじ登り見渡した途端に発した言葉は”あつ山が燃えている”であったそうだ。」と。つまり、十勝岳の噴煙をみたのである。この活火山は、美瑛町に分布する火山灰から見ても、遠い遠い昔から相当の暴れ山であったに相違なく、現在私たちが「大正火口・安政火口・62火口」などと称しているのは、ごく最近の爆発を確認したにすぎません。十勝岳の火山活動を地形・地質学的にみると、

(1)今から3,000~4,000年前

十勝岳頂上の北西斜面、前十勝の東側に新しく火山活動が始まり、溶岩流は北西斜面に硫化し、望岳台付近まで達した。山体はあまり大きく成長しなかった。

(2)今から2,200年前

新しいマグマが発泡し軽石・スコリア(岩さい)及び火山灰の混合物となり、高温の火砕流となって急速に流下し、白金温泉付近まで達した。堆積物中に多数発見される炭化木から、この火砕流がハイマツや針葉樹林帯(エゾマツ・トドマツなど)を焼き払って流下した。

(3)数百年前から

火山活動は、グランド火口の北西部に収れんし、ここに中央火口丘(丸山)が生じ、約280年前には望岳台付近まで溶岩の流下する活動があった。

以上が、炭化木の放射性炭素法による絶対年代から推定されたものです。

その後、伝言えと記録から

(1)安政4年(1857年)ごろの活動

*4月27日、焼山(中央火口)周辺に噴気孔の活動(足軽松田市太郎の石狩川水源見分書より)

*5月23日、山半腹にて火口燃え立て黒煙天を刺上る。火脈と記され、おそらくこれが最初の爆発記録と思われる。(松浦武四郎の石狩日誌より)

(2)明治20年(1887年)ごろの活動

*9月、十勝岳(ケルニ)山頂に大噴火あり、周囲凡半里にして常に黒煙を噴出する事甚し……。年々大噴出をなすこと数回に及び、時として忠別近傍まで灰を降らすことあり。(北海道庁技師大日向伝三の北海道鉱床調査文の記録より)

*明治22年(1889年)も活動。丸山東南部湯沼火口(住民の口述)

(3)大正12年(1923年)~昭和3年(1928年)の活動

*大正12年頃から再び噴気活動が激しくなる。大正14年に中央火口丘の中央にある火口が活動し、直径30m、深さ20mの噴火口が出現。

【大正15年(1926年)の爆発と泥流】

2月中旬ごろ、直径6~10cmの砂小石を飛ばし、噴火口では噴火が盛んになり、鳴動、震動、降灰が続き、下旬には火柱も加わり、5月24日12時11分に1回目の大爆発。この泥流は、白金温泉の風呂場・橋を破壊。14時ごろ、小規模な鳴動・噴火があり、泥水が美瑛川・富良野川を濁した。16時17分すぎ2回目の大噴火。この爆発で、中央火口丘の北西側が破壊され崩壊物は急速な泥流となって下流。さらに積雪を

とかし第二次泥流を発生させ大災害をもたらした。おりからの雨をまじえ、流動性・移動性を生じ、泥流は主流が富良野川へ、一部美瑛川に一気に下流した。

- 死者・行方不明者;144名
- 負傷者;109名
- 罹災者;2,505名
- 損害;256万円(当時)
- 破壊建物:372棟
- 水田:680ha
- 畑:507ha 等々



(4)昭和37年(1962年)の爆発

10年前の昭和27年8月17日、スリバチ火口の西方山腹に活発な噴気孔が生じ次第に成長した。(昭和火口)昭和29年ごろから大正火口の噴気活動が激しくなり、噴気孔から火口そこへ溶融硫黄が流出した。昭和34年6月10日に、火山性地震が明瞭に観測され、11月に昭和火口の噴気孔が小爆発を起こし泥流が約100m流出。噴気孔直径15mに成長。5月~6月に1が日41回の火山性微動を記録しマグマが上昇し始める。昭和37年6月29日22時、ついに噴火。白い煙が上がり、大きな爆発音と強い上下動を感じ、その後黒い噴煙が上昇し、稲妻が光った。

噴煙は、海拔12,000mに達し、降灰は根室沖にまで達した。

- 硫黄鉱山職員5名が死亡
- 負傷者11名
- 硫黄鉱山宿舎が燃える。
- 62火口の誕生
- 避難小屋までの泥流



(5)昭和63年(1988年)

~昭和64年(1989年)の噴火

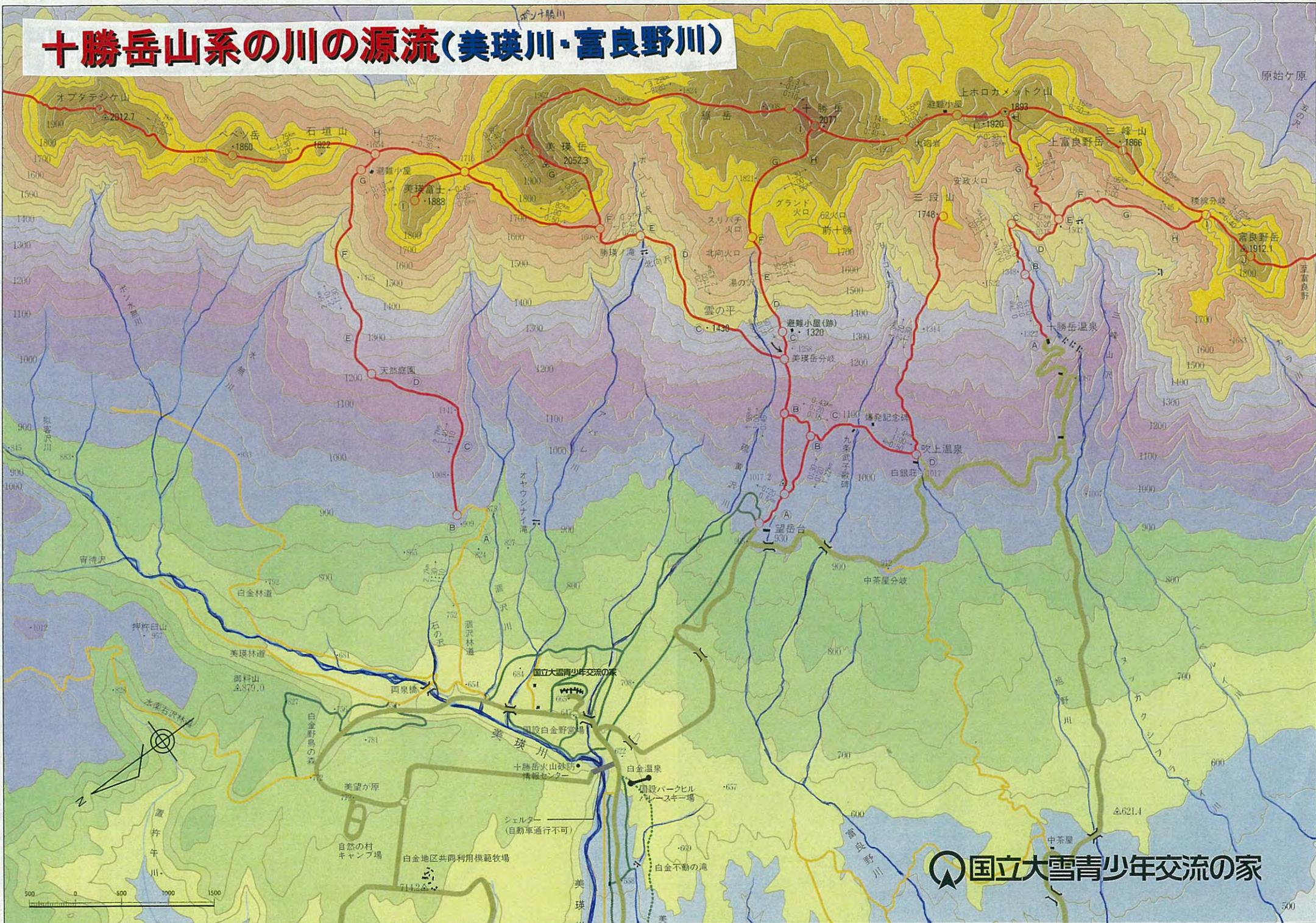
*62-2火口を中心とした62火口の噴気活動が激しくなり、小爆発を繰り返す。泥流が発生し、白金温泉の観光客が国立大雪青少年交流の家などに避難する。

(6)平成23年・24年

*硫黄の自然発火が起きる。(例年にない大気温の上昇)

(※今まで、十勝岳は25~30年周期で噴火している)

十勝岳山系の川の源流(美瑛川・富良野川)



「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地図を複製したものである。(承認番号)平11道復 第144号」

国立大雪青少年交流の家

望岳台周辺で見られる植物



イワブクロ (ゴマノハグサ科)



マルバシモツケ (バラ科)



エゾイツツジ (ツツジ科)



マルバシモツケ (バラ科)



シラタマノキ (ツツジ科)



ハイマツ (マツ科)



ウラジロタデ (タデ科)



エゾオヤマリンドウ (リンドウ科)



シラカンバ (カバノキ科) (シラカバ)



メアカンキンバイ (バラ科)



ガンコウラン (ガンコウラン科)



コケモノ (ツツジ科)

十勝岳連峰の動物たち



エゾシカ



エゾナキウサギ



エゾユキウサギ



クマゲラ



イワツバメ



ヤマセミ



エゾリス



エゾヒグマ



キタキツネ



ミヤマカケス



エゾフクロウ



ノゴマ



エゾクロテン



エゾシマリス



イタチ



ヒンズイ



ハクセキレイ



コマドリ

十勝岳豆知識

◇十勝岳連峰の山の由来

現在の山名が、いつ、だれがどのような意味を持って命名したかは定かでない。昔、アイヌは目印になる山や狩猟の山など、生活に関係のある山にのみ便宜上の名をつけたにすぎなかった。しかし、意味を調べると、アイヌの人たちが鋭い自然の観察者であり、北海道の自然とともに暮らしていたことがわかる。名もない山に名を記した最初の人、松浦武四郎であると言われているが、彼はアイヌの人たちを道案内とし、詳細な地図を描き山名を記した。その特徴は、川の名と山の名が同じものが多いことである。

- トカプチ……昔、アイヌの人たちがこの国に移住したとき、先住人コロポックルがいた。新たに移住してきたアイヌの人たちが彼らに危害を加え、彼らはどこかに旅立ってしまった。その旅立ちに望んで十勝川の岸辺に立って「トカプチ」（乳汁よ枯渇せよ腐敗せよ）と叫んだという。「トカプ」とは、乳の意味で、十勝川の川口が二つに分かれて海に注いでいるのを、二つの乳房から無限の乳汁が流れるようにと、川すじに住む者には「母なる川」であった。
- 十勝岳……十勝川の上流にある山名であり、明治の開拓時代には「ひむがしの空の高い所に火を抱く十勝は父とわが仰ぐ山」というように十勝岳と呼ばれ、明治の中頃には「本峰」と称された。
- 美 瑛……明治32年、町の開拓が進み、鉄道が開通するあたり、それまで「ビエイ」であったものを、早崎悦太郎が「ビ」を「美」で表し、「エ」を王のように秀でた玉のように清らかで明朗であるようにと「瑛」で表し、「美瑛」とした。
- 美瑛岳……ビエイ岳から美瑛岳となり、川の源流にある山につけられた。「ピエイ」は油こい・油ぎったという意味で、「水源に硫黄山あり水濁り脂のごとし」と地名説明がある。
- 富良野岳……富良野川の上流にある山につけられた山名。フーラヌイ（フラスイ）川という開拓以前の名があり、臭き原野・腐れる原野という意味で、富良野川の上流にある硫黄山（十勝岳）があつて、山から流れるこの川に、硫黄の臭気があるため飲むにたえられぬところからこう呼ばれた。富良野は、上フラス・中フラス・下フラスの地名がある。
- 上ホロカメツク山……逆流する水たまりの所に隆起する山のこと。逆流する川とは空知川水源のシーソラブチ川のこと。「ホロカ」本流に対し逆流する。「メトック」突き出る・そびえる。という意味です。（アイヌ語）



エゾオヤマリンドウ
（十勝岳望岳台より）



イワカガミ（富良野岳より）

- ◇十勝岳連峰の森林限界は1,500m前後で、その森林限界を超えると「ハイマツ」帯（高山帯）となります。
- ◇大雪山系の植物は、シダ植物を含めて576種あります。そのうち、ハイマツ帯以上に生息するのが240種ほど、さらに森林地帯に本拠をおき生息する種類を除くと、いわゆる「高山植物」と呼ばれるのは170種ほどです。
- ◇北海道の植物の名前には、よく「エゾ〇〇〇」という名前が付いています。それは、むかし北海道を「蝦夷（えぞ）」と呼ばれていたことから、北海道特有の植物ということ。また、「ユウバリコザクラ」「レブンアツモリソウ」など、地名の付いた植物もあります。